俳諧百一集

へ 5
1451

門へ 刊5
號 1451
卷

明治三十九年十月十五日
山田市郎

佛語百一集序　越中康工選

敬而百人一首行道哥連哥
仙哥[illegible]

[illegible]世[illegible]抜[illegible]

慕[illegible]

あまりにみのうへのくるしさと
恵まれ多師を作り蓮を求め
まること何百かくもしるしを
近ち朋友かくの桜本のせく
ひかる意まるさまを永正乃
頃ふ寄武乃てを文ふ宗盤実永
ふ貞徳貞宗を芸者立国を頻
度ふ寛文ふ宗周かく世ふ
生ん遠有ふひとも体一ふ
生んかてを一変ふ桃青初く変と

[illegible]眼前乃[illegible]のまゝの石碑乃さま
[illegible]とゝるゝ流り[illegible]中乃有く
松尾乃[illegible]を所[illegible]感を
踏く天下幾[illegible]芭蕉風乃敗樹
西行と[illegible]古人乃

名師乃門人日去来有く実情を
うつして真角丈草嵐雪涼菟北枝
各よく俗の風雅をうしなふ許六ハ
文雅の支考を風雅の血脈を傳
附句を以乃一人にして万踏乃

[illegible]中須臾由出之潛[illegible]
自然乃古有[illegible]於[illegible]風流と
[illegible]今[illegible]海内さんなりし
[illegible]巧[illegible]
物作[illegible]の造化の神をもとく

[illegible]毎一具秀眼力乃[illegible]
[illegible]世鳴[illegible]秀逸を[illegible]
[illegible]乃[illegible]
[illegible]て載之則百[illegible]
[illegible]や[illegible]

まことに其句
乃意乃ゝるを筆者用ひて
説ことゝ世に初学の人乃為め
ゝも法書乃海と行はゝ弱
き乃ゝるその一二を述るのみ

寛暦十四年
甲申夏五月

八椿舎自序

古池や　蛙飛こむ　水の音

伊賀　芭蕉

心なる言葉や有らん
吟じて有ること清
嘯さながら自然と行
中に平生の風雅
乃ち有る所云ふ如く
独歩して信を作す

之部中

神代

乃

事も

思へく

伊勢

守武

此神職や古代の門く

山陰と扶桑と

冨士乃山

山城

宗祗

せく

物

乃

之部

乃

今乃世を

さそふ世乃調を

ふるし

あしこきれ
宮耳も
叶
こえしう

伊勢 望一

常に耳を開くしく
万物を寿直き心
泰山の下し

名家の手跡

月やあらぬ
我身
ひとつの
新法師

京 貞徳

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此百[illegible]山の桜京

[illegible]

京 貞室

一[illegible]

京 立圃

師走乃

[illegible]

衣紙

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

京 重頼

[illegible]

梅

順 [illegible]

[illegible]

[illegible]

京 [illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

京 湖春

年毎ゝの花ともあらず

師走山

寡士乃一句乃塩梅乃雪乃

風景とさへ見えて

懐紙し

白露縁や

せゝら別

あらう

豊前

秀吉乃袖を

扇吉

浪花 宗閑

福寿や

秋乃夜のかすかあるふ
寿や文ゆうあるへと学の
さ海を歌しけるを
通ひ乃ひまを者へと
東ゆるを用を弥しの
高体を今へ絶作へ

さの乃ふ

西

江戸 其角

夕乃秋

涼花 見龍

略

自然と眠乃高ひ乃ハ也
ふ成りてあ乃也
む三京乃さ乃ま
ひ乃へくをを腸を
新しむ

声ふ

生呵乃

江戸 嵐雪

東山

すかたや

寐たる

蒲團着て

象乃姿にして
誹る平安乃景色
反る狂乎意し
聞えぬにゆかし

應〻といへと

敲くや

雪乃門

京 去来

いつれも皆此
寂乃所をさとる
皆うらやむ
所なりとて

隨聞記曰
大草支考曲翠正秀其角許六なとの称嘆
是を家に略す去来答曰情ある答へこそ
自然に曰此句に自然と寂乃つくぬるとおもへと
侍り惣て翁の句ハ強も弱も精なるも定めなきも

取つゝ
ちゝて
うゝ

蛙

麦ふむの色とゝ忘
るゝ此人の悟道を
ゝゝて

蛙 屋張 丈州

風乃一日

吟ゝ
ゝ
み
ゝ

有乃作を述ゝる事
ゝ身の粉骨ゝ大悟ゝの
絶唱ゝ句乃如ゝ
ゝ人ゝ詞をゝつゝも
ゝゝ作るまゝゝや
只自然乃ゝ人

京 原蕪

而後乃籍白らく言ふ
さしく陽炎乃さかりと
ろはちいつさ満ゆと
あく出ゆしく真ふ
其の筆意ある式

陽炎や
碑乃
ぬれてる
麦乃雨

近江 許六

百尺乃竿頭つきて
得る妙手段

夕風や
何の吹
あけさ
庵月

加賀 北枝

初しくれ結めや垣の此志縁乃

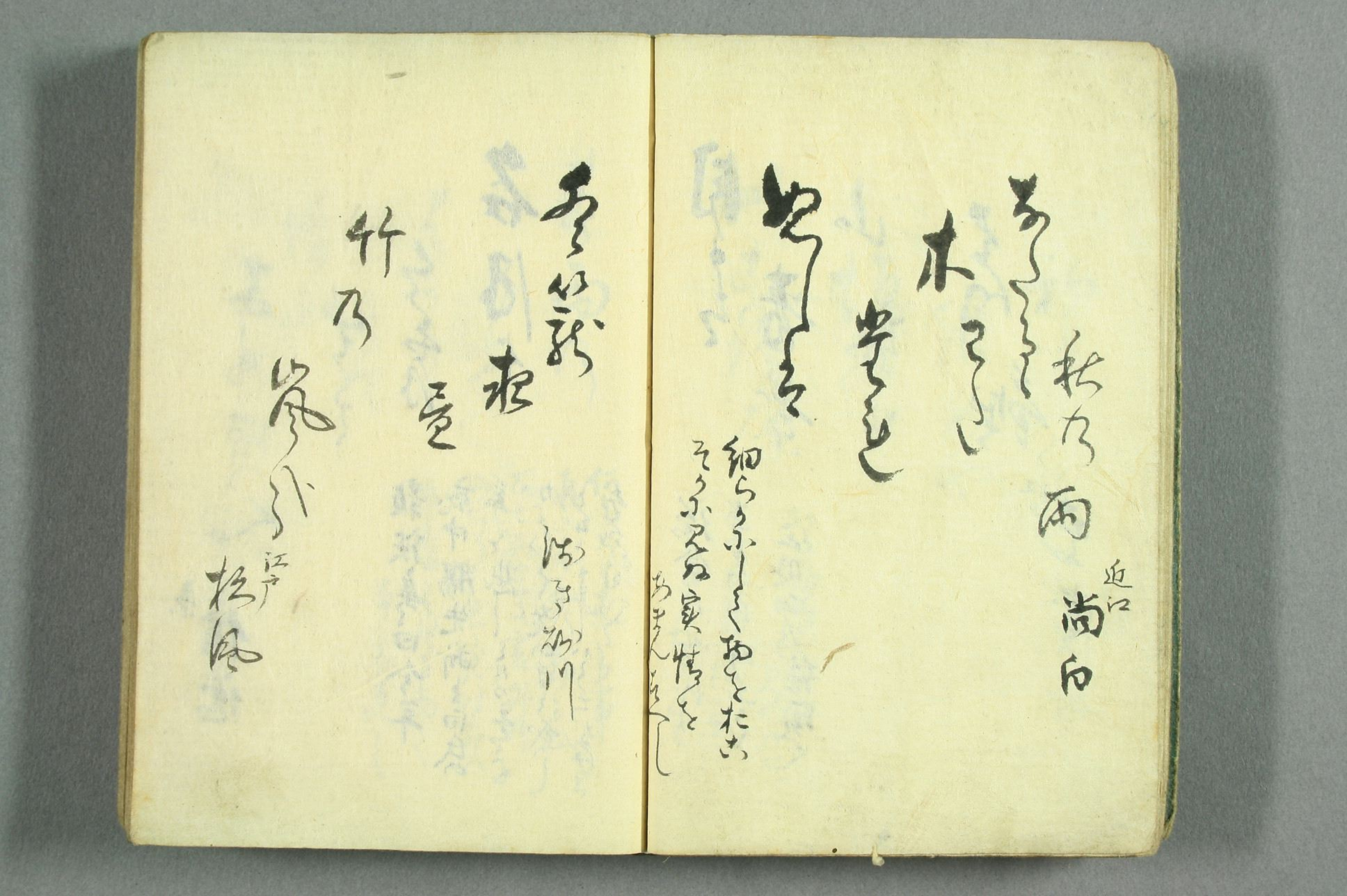
難波 野坡

何處を方と見つけて
よく不易流行
をもいれて

目には青葉山郭公初鰹

江戸 素堂

鎌倉乃吟なり
当意即妙にして
三段切乃絶頂也



京 信德

雜談集曰今年
就中腸先斷と白氏の
年を悲しむる言葉も
かなしく老のまさに成へし
とてよもしいろいろ
[illegible]

何とも述る事
無ふ去年乃詠
百七夕の言外乃
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

桜州
鬼貫

風乃星て
世ちかく風乃
言水
碎乃落る強せて
有て
海乃せて
京
言水

裏葉の
裏を
ちる
やたらうるさひたて
えもいはぬたまの
うちひとこと
義淡
木因

[illegible] 加賀 一笑

雨 [illegible]

[illegible]乃雪 かゝる所乃ゆきと
降るゝ又乃ゆき
[illegible]

[illegible]乃 おなかゝ八月もめてし
[illegible] 昔男の金吾尓
[illegible] 仍て七十二を刻世上人乃
[illegible] 年をくし朝顔を
[illegible] 求たゝて秋乃花
[illegible]

七十二 山城 佳口

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

近江 千那

[illegible]

[illegible]

[illegible]

近江 木節

百花乃中ニ[illegible]
自然乃寂ヲ聞く
感[illegible]

月夜うめの香　長秋　嘉門

海乃

さゝるを

心詞及如海棠を
ゝゝを月乃にかゝを
作を彼都良香の
詠ゝゝ考ゝゝ

糸割を

三千世界ハ眼ノ前ニ盡又と

枝竹や

安くゝと入ゝ意味ゝ沙
海棠ゝ香竹ゝ金橘ハ
酸ゝゝゝゝゝ

ゝゝゝ

二三年賀　百子

[illegible]

加賀 秋之情

[illegible]

月和尚

[illegible]

上[illegible]言語
道斷乃[illegible]

命

[illegible]れ

江州尼 智月

麻がらを踏みて
岩戸の
月見ると
即真辞小僧
授戒乃喜び
上人の慈悲を
移せし

武中
浪化

秋乃風
うつる
あくる
近江
正秀

殺生乃法上也
ちるもあるも秋風乃
あはれ一人小
しぐれ

約束や

うらやまし

おもひ

切時

猫乃

意

浪化君乃閑書ハ日

宝永ハ乃

うらやまし世ハ

思ハぬ猫乃と

ふるまひ

尾張

戦人

近江尼

芳樹

恢まを和

花乃

春乃

焼く

菫乃さく

俤門ハ月乃上の意乃

名句まを之二章を

その所とかく

俳諧師

春雨し
底さおもへと
きこゆる也
哉

随聞記ニ曰
何時ハあるの也まゆ
晴ゆしなくて又
人ニ恋しくられ
是小僧く

尾張
野水

うまれ時を
墓乃
まとゆるも
雨夜かな

性命ニ曰う故ことし
言出しく賤乃まと
まとひてふ家の一度
根乃あ[illegible]流く
衰嫗りしる何の仇
久しきと清くかきゆ
あさむく筋をも亀せり
とそ

信濃
曽良

生乃面　口吹　句宜

霜を

紛入

梅ゝ雪や

梅ゝ咲けるを見るに
ゝゝ乃下もしも
十月を忘れ

花乃雨　京　化北

うゑの

雪横

下京や

浪化君乃閑書ニ曰
上ゐも一宝ゝと
笑のかゝもしめ乃
ゝ講ゝ主乃を乃く
弟稽小兄侍ゝ

京花 その

見式部の風情真小
葉なるに　なもとの
ちふ〳〵誰の見ても
おもしろく

京 友吉

月を四角にもなすなと
なるべき〳〵実もさみし
吟じうるを一作よく
四角なるべくもあらん
いりん

月を
文科乃

[illegible]

近江 [illegible]

時雨乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

水乃音

近江 木導

麦乃

仲

[illegible]

[illegible]

[illegible]

花ちる時ハ花をおもひ
花ある時ハ手を返し
しる事身乃放逸も
もなきなく

ゆふ雨や
葉はく
ちらふて
おとひ
なしまて

近江
二水

雪をながめしも一夜
雁のなる歌聖乃道
詠みよろしき女乃情
ありしあて

男なく
一夜
雁なく
つれん
春乃山

近江
とよ

秋乃松　京　和及

遠くより

大名乃

[illegible]

為くるく　京　重軌

風を

世上不

花咲て

[illegible]

世間を　丹波　すて

義を思ふて

身をすて

栗乃梅や

不易の印あり心を心とし

風流の真実を貫有

世夫人乃心をおしはかる

とゝ基時詠ス

家子

為ふ

作ふを

ゆゝ

東乃雪　近江　とめ

花ハ
思フ
み

梅

梅乃実

丹後 從吾

虚有り實有り寂寥之

夕暮も
曙も
外ノ
影哉

尾張 芭蕉

秋乃夕の月も曙乃さるもうも
外しと影哉のふてうる者をそのまゝ
述て意ふそこなくて清新を好う

物おもふ

人を

うらぬる

水

火焼式

丹波 左静

その姿名画乃細色をなつかせり

丹波 辨三

清水

高砂

石燈籠

燈籠も清水寺

もとやゝ枝ゝ高き

一声を雪乃ふるの

ゝ

さゝ

みハ

伊勢

兎七

初霜や

腸氷るこゑ寒雁

雁さめ鳴けばいよ

さゆるかな

二月

月東に

伊勢

五竹

ゆかしさの

廉乃声

遠ゆかしさの

なて感情石鞋

涼しさの
もとの
主や
神路山

丹波
尼
素心

此句の意とおなじ
作らざる前の
世界吟出せるなり

晩や
灰の
中より
きりぎす

涼菴

涼き

山路を

石間〳〵の

鶯子

啼く〳〵

比叡乃

きよらかも

於

加賀

舍那

於

能登

司馥

世を恨る子の長恨を

移して目睫連の

昔も一ときさく

常に都なる山路乃つよき

声をきくにつけて

閑寂ふかし

梅乃花　イセ　春波

ちるを

鶯の声ふ

鶯の今乃かをとさと
似いきとひあて
ちるしあらし

初子の日

橋乃流れを
ひとすくひ
世を経乃
感乃

橋乃

ちるみゝ　賀　茂風

よもすがら
ちるもの
くさ
砂とり

杜菱（イセ）

風雨寄羅めて
刻さらす長し

長乃長
ちるもの
細き

江戸 秋凡

青柳や

曲節自在

[illegible]

[illegible]

[illegible]

賀

千代尼

海[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

尼

珈涼

白雨乃形容新[illegible]奇也

里

越中 麻父

きくの村も

菴

堪

加加ゝ不聞に都高ゝ伊子乃里

古歌乃俤をそなへ八乃字乃

俳諧言葉乃所作にて旅情を表す

何くとくく

自然と切籠

心細

声乃

鉢や

拉乃

雑子

イセ 岸虎

萩乃花
咲きしより
日々
乱るるカ
馬洗

萩の葉の
面洗ふ
や
雨さめ
生毛

畑中に
芳野

柳　この邦　左菊（カク）

素林原乃評る乃山乃花い云ひみあ〳〵
を感心不少細工をつまとたる是乃
白〳〵実〳〵実〳〵実〳〵

一　口家乃
灯を
中丹
〳〵
くるを
江戸　馬醉

一點ノ漁燈香靄中　蓬らゝ似うまひ
風糸さ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵味ひを

灯火を
つゝむ
風の
衣かな　雪　江戸人　蓼太

寒さのあるとゝのあるくつゝ心なしたる
竹の花かな

あくつゝ人や　元風

人も
月
寒月
待宵や

拾ふ中ゝ空の月を
ひろひ物中ゝ楽も
つゝゝゝ下ゝ字よく
俳点小滑稽の
おゝゝみゝ

春乃雪

里や
有美
島

江戸 涼袋

ちりくくハ雪乃霧と
化るなり百千乃声て
誘ふなり乃宇美の御き
感語洗くれ

くるる

晩九

庚月
竹田

義蓋

附節の系氣而乃
さ海をたもひ今世て
ゑゑくし味窮り
なし

尾張 也有

あはれ留主
雲霧も
とちらの
是非や

夕顔の宿乃主
むかしを今に見て
足もと恥しう
作言流したる

折人に
ちる姫さ
うるや
女郎花

物語なとの言葉をもつりて
大象髪[illegible]なけるかことし

封卜

芙蓉を和 其河

[illegible]

如是[illegible]

有明の

[illegible]乃心さくまで
めきて月らめたるを
移す芙蓉乃花を
[illegible]ひたる俤也

交琴

[illegible]

識丹

[illegible]

[illegible]乃世乃人と友として
風流乃閑居のさ海
器中て忘れたる

初

武蔵 柳九

夕雲と

赤々と秋乃さびしさも
又なつかしき物の哀
かりそめの時雨乃風葬
眠乃さめしうらうら

如何ばかり

よく四時乃変化
枯ひゝ結もたて
多枝の流れを
つんゝくし

蔦を

孤独

葉

元禄 大阜

哥仙ハも遍貼を
巻かえさくひ
あらくら

松風乃
落ちも
もとや
下乃河

武蔵
門瑟

花乃八谷ハ世の
人ハ説かき教句を
路しき泥中乃
蓮乃こゝろし

日言中乃
花静之
乾乃
露

芥水

竹遠く人家へ

武蔵　巻阿

梅うゑしや

梅うゑしことを
ほけて流水東流す
復向西ゝ
芳あり

雪乃松

積もる

芳人

何を

面白や

五もしらぬ花うく
風雅也

梅乃花　蘭更（カ）

中年
燒乃
山路や

人住けてそのまゝ残る
きくや去年の菊さかり
眼中ふかく

山家や　可枝（カ）

雲志
蟬乃
明仕舞

中古乃風骨を存ス

紫

桜乃

庵乃

もらハぬ

延延花ハ狂心して
思ふ人ハ
さ[illegible]
ひ[illegible]

汪由カ

嵐ハや

青乃

あらハ

まよひ

雨

青ゝいひく柴出山乃
さ海計ハ行きゝ
ゝの宗音の身柄ゝ
ゝゝ情原ゝ

既カ白

初鶯

三ツ

四ツ

清かう枕ハ仍てその
ものと雁恵乃芽茅を
見る心地せらる

見くあ

ちて 淡花 馬明

絃

叩 或 ハ 靜

青

ものさ

知る秋

淡矣子寂色
ちて

新乃花

咲くや

春の

雪の

雫

ある時のものかも
あるものと世上乃
評を信ん事なかれ
愛小亮を投
しぬ

於

越中

康工

夕

去ぬ

江戸

柳花

春雨

竹の

今朝

人もまた世をさ
ばうる客まく
思ふ事小真世
風情を優ぶ
ぶる

初春の和歌　廬元

梅

山川も

雲乃

大事ハ元日ハ雲ハ春の初春と
さ侍もおく雲の初春と
作ハ春ハ一字の新しみと
さらせり

紫和乃

春雨

春中

死しるあと活
文楽眼前ハ
うたを見ハ自見ハ
ハ春ハ春ハ立枝春の
字ハ見も御事優ハ
春ハおめでたき
こと

翁歌　希周

乗くらべ　伊勢　李林

さとひら

あるも

うんこうの

そのうのさとみ
おこりて安人も
さとり多も佛
天性不思議神境と
なるべし

謝林百一集跋

余嘗善謝之言談而不
不厭簡而文古之次益
厚矣于古國風之變也亦
尚矣謝仍有人名梅青右興

焉蚍風夫振日鍊月鎔愈
出愈奇嘖〻諍鳴也夫性
靈〻發於天機者投棄篇
之生風吁吟喝應響現元究
心陶冶性情發泄渟滯豈
之元裨於世道乎哉今斯篇
や元名生一〻生而吹嘗不
同心可知于康工氏用心の謂
保切棠篇之功而躍于治
〻中者余主知謝之至矣

若但知其尚而文法而已
厭之爲可善爲而已是爲
跛語水竹教人也

雅時弘化五年戊申孟春
寫之